

# 新免遺跡

第23次発掘調査概報

— 阪急宝塚線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 2 —



1988. 3

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団

豊中市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は阪急電鉄宝塚線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は阪急電鉄株式会社が阪急宝塚線豊中市内連続立体交差造跡調査団と委託契約を結び、第Ⅲ期発掘調査として、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局をおいて実施したものである。
3. 調査は1987年9月11日より11月10日にかけて実施した。
4. 整理作業は1987年11月より1988年3月まで豊中市立郷土資料室にて行なった。
5. 本書の執筆・編集は森幸三（豊中市教育委員会文化財担当嘱託）が柳本照男、服部聰志（豊中市教育委員会）の指導の下に行なった。
6. 本書の遺物の実測・トレース及び造構のトレースは岡村勝行、森の両名で行なった。写真は調査現場において、竹谷俊彦、森が撮影し、遺物写真は服部が撮影した。

7. 本書の作成に際し、藤沢一大氏（四天王寺国際仏教大学名誉教授）、都出比呂志氏（大阪大学文学部教授）、東野治之氏（大阪大学教養部助教授）、福永伸哉氏（大阪大学文学部助手）の御指導、御助言を頂いた。記して深く感謝いたします。

## 本　文　目　次

I. 調査に至る経過.....	1
II. 位置と周辺の遺跡.....	2
III. 調査の方法と基本層序.....	5
IV. 造構と遺物.....	6
V. まとめ.....	17

## 挿 図 目 次

第1図	上空から見た調査地点	1
第2図	調査地点位置図	2
第3図	新免遺跡と周辺地形図	3
第4図	周辺道路分布図	4
第5図	第11次・第23次調査遺構配置図	5
第6図	落込み1断面	6
第7図	落込み1下層出土遺物実測図	6
第8図	筒形容器台出土状況	7
第9図	筒形容器台実測図	7
第10図	谷状地形内出土遺物実測図	8
第11図	蓋	8
第12図	蓋実測図	8
第13図	SK-6平面図・断面図	9
第14図	SK-6全景	9
第15図	SK-6出土遺物実測図	10
第16図	SK-6出土遺物実測図	11
第17図	SK-6遺物出土状況	11
第18図	SK-6遺物出土状況	11
第19図	SK-6遺物出土状況	11
第20図	SK-7平面図	12
第21図	SK-7遺物出土状況	12
第22図	石鎚実測図	12
第23図	SK-7出土遺物実測図	12
第24図	SK-8・SK-9平面図	13
第25図	SK-8断面図	13
第26図	SK-9断面図	13
第27図	墨書き器	14
第28図	墨書き器実測図	14
第29図	土馬	15
第30図	土馬実測図	15
第31図	SK-9出土遺物実測図	15
第32図	SK-9板材出土状況	16

# I. 調査に至る経過

はじめに 新免遺跡は昭和10年頃に地元の民家庭園内より、弥生土器片が採集発見されたことにより、弥生時代後期の遺跡であることがはじめて確認されている。しかし、遺跡の規模・性格など具体的な内容について論じられるまでには至っていなかった。その後、'80年代になり、現在の豊中駅周辺に開発建設されていた多数の木造住宅の建て替え工事が進み、それに伴う事前発掘調査が頻繁に行なわれる様になった。現在までに22次に及ぶ発掘調査が実施されており、調査の概要は各年度の「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要」に報告済みである。これまでの調査から新免遺跡は縄文時代から近世に亘る長期の複合遺跡であることが確認されている。特に弥生時代中期中葉から後期にかけての住居跡、方形周溝墓が多数検出されており、この時期に非常に発展した集落であることがうかがえ、豊中台地に位置する遺跡の中でも中核的な位置を占める遺跡として注目されている。

**調査の契機と経過** 阪急電鉄株式会社、大阪府、豊中市の三者は、現在、国庫補助事業として阪急宝塚線連続立体交差工事を進めている。この計画の予定地の一部が新免遺跡の指定範囲内に含まれており、市教委の試掘調査により遺構・遺物包含層が確認され、遺跡の保存状態が良好なことが判明した。この結果、府、市、阪急電鉄株式会社の三者協議にもとづき、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局を置いて、阪急連立遺跡調査団を組織し、本調査を実施するに至ったのである。昭和60年8月～12月、昭和61年4月～6月にかけて、第Ⅰ期、第Ⅱ期として発掘調査が実施されている。第Ⅰ期の調査の概要是すでに「新免遺跡・第11次発掘調査概報」に報告がなされている。今回、第Ⅲ期の発掘調査として、高架線路建設予定地の一部に当たる、豊中駅西方約160mの範囲を、昭和62年9月末より約1ヶ月半の期間をもって実施することになった。



第1図 上空から見た調査地点

**調査組織** 調査団は富田好久（青山短期大学助教授）を団長として構成され、現地の調査を森幸三が担当し、調査員として竹谷俊彦、調査補助員として大西博和らが参加した。

## II. 位置と周辺の遺跡

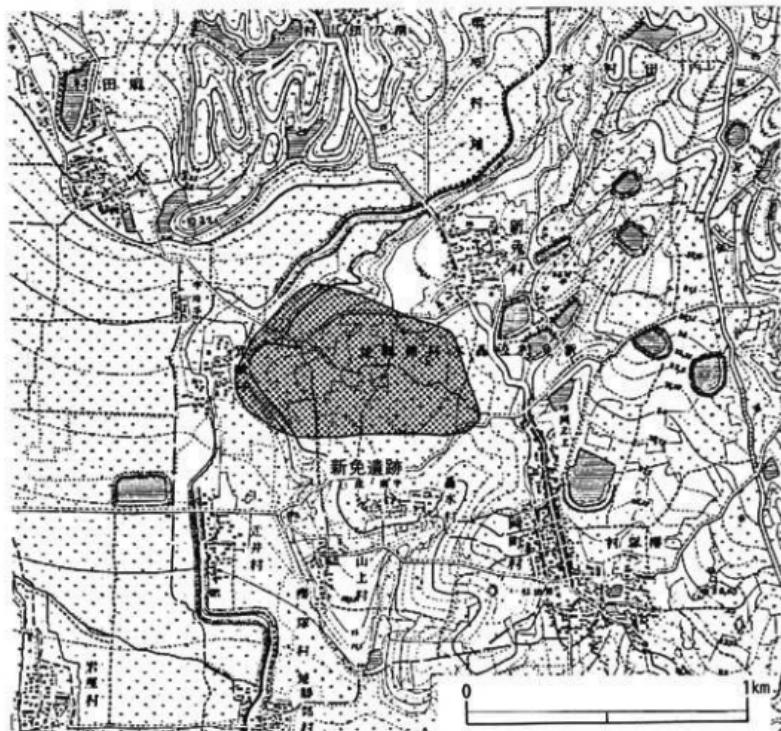
**位置** 新免遺跡は阪急豊中駅の西方、およそ南北600m、東西800mに広がる遺跡である。今回の調査地点は、豊中市玉井町1丁目に所在し、遺跡の東北端に位置している。

豊中市域は北部に待兼山丘陵、中央部に豊中台地、西部・南部に西摂平野と比較的変化に富む地勢を呈しており、数多くの遺跡が点在している。新免遺跡は豊中台地西端部に立地し、北に千里川、西には広大な沖積平野を控えるなど、極めて良好な居住環境を有する遺跡であったと推量される。遺跡の範囲は北限を東西方向に走る小さな谷状地形により画され、西方は孤状にまわる台地端部の急な段丘崖により、南方は旧山ノ上村の北方にみられる緩く入れ込む谷状地形により画されるものと考えられる。東側は第20次調査及び一部で実施した立会調査の所見から、現在の阪急宝塚線を越えた付近まで広がっていたと思われる。



第2図 調査地点位置図（網目は既調査地点）

**周辺の遺跡** 旧石器時代の遺跡は螢池西遺跡・柴原遺跡でナイフ形石器の出土が知られており、縄文時代には市北部の野畠遺跡・野畠春日町遺跡などが千里川流域に点在している。弥生時代になると猪名川流域と豊中台地の縁辺部を中心に宮ノ前（螢池北）遺跡・螢池西遺跡・箕輪遺跡・勝部遺跡・服部遺跡・小曾根遺跡・曾根遺跡・穂積遺跡・利倉西遺跡・庄内遺跡など著名な遺跡が数多く分布する。北部丘陵上に位置する待兼山遺跡は弥生時代中期の高地性集落である。古墳時代では前期の待兼山古墳・御神山古墳、中期には大塚古墳・御獅子塚古墳を含む桜塚古墳群、後期には太鼓塚古墳群・新免宮山古墳群などがある。また、集落遺跡として、新免遺跡の北東に位置する本町遺跡・柴原遺跡・内山遺跡・螢池西遺跡・山ノ上遺跡・利倉遺跡・利倉西遺跡・島田遺跡・庄内遺跡などがある。なお、本町遺跡・柴原遺跡は桜井谷の支谷を利用した須恵器の古窯である桜井谷窯跡群と密接な関係がうかがえる集落である。飛鳥・奈良時代以降の遺跡としては、金寺山廃寺・柴原遺跡・島田遺跡・上津島南遺跡・穂積遺跡・小曾根遺跡などがあげられる。



第3図 新免遺跡と周辺地形図



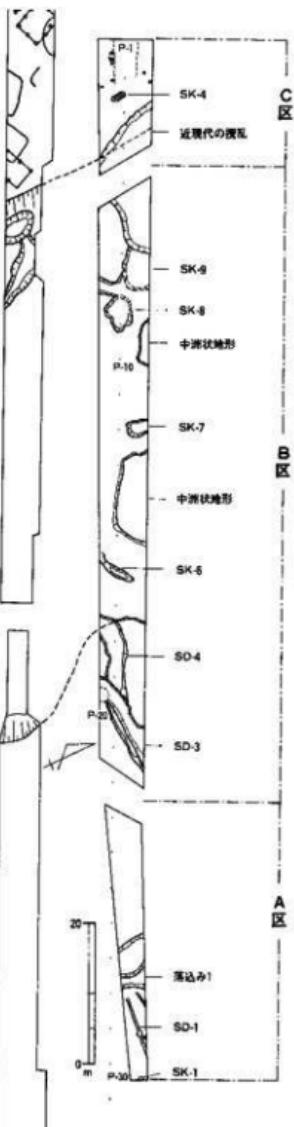
第4図 周辺遺跡分布図

### III. 調査の方法と基本層序

**調査の方法** 今回の調査地点は新免遺跡第11次調査の北東部に隣接している。調査区は幅約7m、長さ160mの細長いトレンチ状を呈している。調査の小地区割は中央に基準ラインを設け、5m間隔でポイントを設定し、各地区的名称を西側ポイントの名称であらわした。なお、機械掘削時に第11次調査地点から続く谷状の地形を確認したため、調査の便宜上、この谷状地形より以東をA区、谷状地形内部をB区、谷状地形より以西をC区に分割した。調査はA区、C区、B区の順で進行した。

**基本層序** 造構面までの基本層序は4層である。第1層は碎石による整地層で今回の立体交差事業に伴うものである。第2層は旧表土、第3層は暗緑灰色極細砂層で近現代の旧耕土層と思われる。第4層は暗褐色粘質土で須恵器・土師器・瓦器片を含む遺物包含層である。第5層は青白色シルト～粘土の地山である。第4層の遺物包含層は後世の削平を受け、A区、B区に部分的に残るのみであり、C区では、まったく残っていないかった。C区以西は近現代に地山面にまで達する大きな整地削平を受けたようである。

造構はすべて第4層の遺物包含層を掘削したのち、地山上面で検出した。谷状地形の肩部も、この段階で検出している。なお、谷状地形の深さは検出向下約50～70cmをはかり、底面までの堆積土すべてに遺物が含まれていた。谷状地形の底面は暗灰色の礫層を主体とした地山であり、中洲状の隆起地形が数箇所認められるなど、凹凸が著しい。

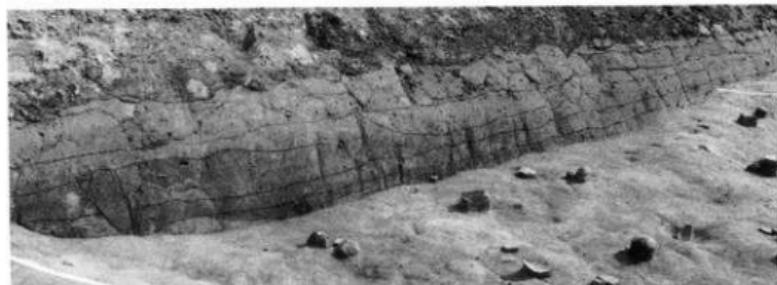


第5図 第11次・第23次調査造構配置図

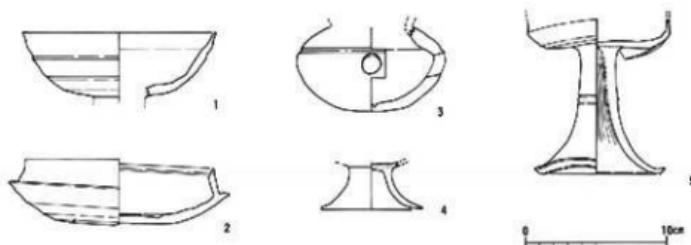
## IV. 遺構と遺物

A区の遺構と遺物 A区で検出した遺構は土坑2、溝2、落ち込み1である。SD-1は幅35cm、深さ6cmをはかり、緑灰色極細砂を埋土とする溝である。埋土の色調から、近現代の耕作に伴う溝と思われる。SK-1は検出部分で幅60cm、長さ50cm、深さ18cmをはかり東方へ広がって行く。黒色粘質土を埋土とし、須恵器、土師器の細片が出土した。

落ち込み1はA区の中央部に位置し、幅約7m、深さ20cmをはかる。埋土は上下2層に分かれ上層は地山をブロック状に含む暗褐色粘質土、下層は黒色シルト質粘土である。上下層、ともに須恵器、土師器が出土した(第7図)。下層から出土した須恵器の杯身(2)は口径11~13cmで著しい焼け重みがみられ、口縁端部に内傾する段を有する。高杯(5)は残存器高11.7cmで杯部及び脚部端部に著しい焼け重みがある。脚部の中位に2条の沈線をめぐらし、脚部は杯部より八の字形にひろがり端部近くで短く水平にのび、さらに凹面をなして端部に至る。端部はまるくおさめている。埴(3)は最大径10.5cmをはかり、肩部に1条の沈線をめぐらしている。<sup>注1)</sup>出土遺物は陶色編年でⅡ型式の1段階から4段階頃までの遺物が混在しており、相当の時期幅が認められる。



第6図 落込み1断面



第7図 落込み1下層出土遺物実測図

**B区の遺構と遺物** B区はP-3~21の約80mに亘る谷状地形の内部に相当する。P-3~6にかけて掘り込まれた擾乱により、谷状地形の西肩は原状を留めていなかった。一方、P-17に位置する東肩もSD-4により一部を破壊されていた。

SD-4は幅3m、深さ30cmをはかる東西にはしる溝状遺構である。黒色粘土を埋土とし、出土遺物は認められず、その時期は不明である。

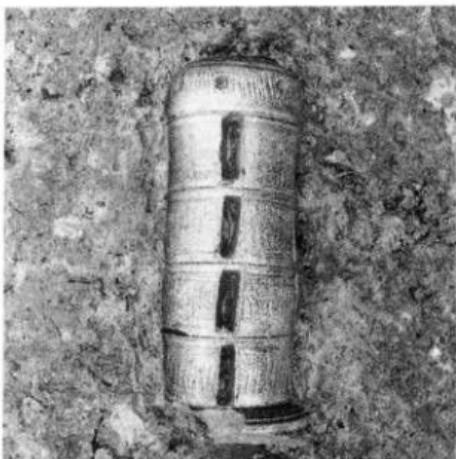
さらにP-19~20にSD-4の上に重複するようにSD-3がはしる。SD-3は幅2m、深さ25cmをはかり、緑灰色極細砂を埋土とする。埋土の色調から、近現代の溝と思われる。

谷状地形内の埋土は3層に大別される。第1層は黒褐色粘質土層、第2層は黒色粘質土層、第3層は黒褐色礫層である。P-7・8は後世の削平を受け、これらの堆積層は消滅していた。なお、第2・3層は部分的に存在する堆積層であり、厚さも一定ではない。

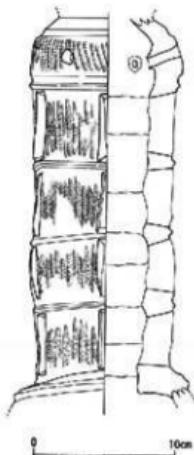
遺物は各層より弥生土器、須恵器、土師器が多く出土した。

埋土第1層より出土した筒形器台(第9図)は、円筒部だけが残存し、残存高29cm、腹径10.2cmをはかる。凹線によって5区画され、中に波状文をめぐらしている。肩部には8方向への円形穿孔があり、下の4区画には各々4方向への方形透しが施されている。焼け歪みがあり、自然縫が部分的にかかっている。

杯身(第10図-1・2)はたちあがりが1.5~2.0cmであり、口縁端部に内傾する平面を有するものと、内傾する段を有するものがある。圓化した以外で出土した杯身の大半が、たちあがりが2cm前後で、口縁端部に内傾する段を有していた。陶色編年でⅡ型式の1~2段階に併行するものと思われる。



第8図 筒形器台出土状況



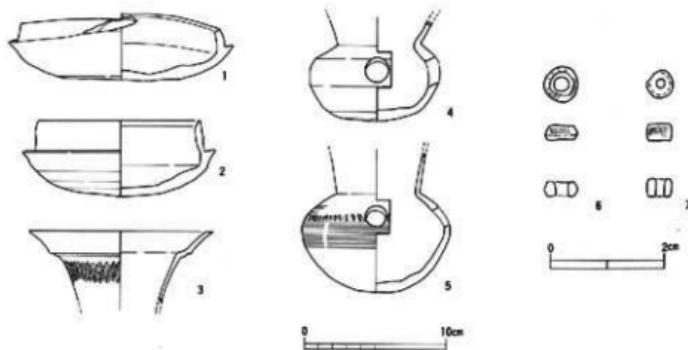
第9図 筒形器台実測図

甌（第10図—3～5）は最大径9～11cmをはかり、（5）は肩部に波状文を施した後、下端をすり消している。（3）は外反する口縁がさらに段をなして外方へ屈曲し、端部に若干の凹部を有している。

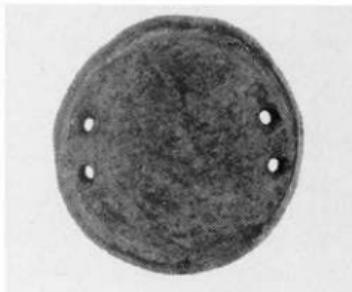
埋土第3層から出土した弥生土器の蓋（第12図）は、円板形で、径6cm、高さ1cmをはかる。周縁の相対する位置に2孔1対の穿孔が施されている。また同層より、滑石製の白玉（第10図—6・7）が2点出土した。（6）は径6mmをはかり、側面に稜を有し、青灰色を呈す。（7）は径4mmをはかり、側面はゆるやかにふくらみ、灰黄色を呈す。

以上、主な遺物について記述したが、他に弥生時代中期から後期にかけての土器が多量に含まれていた。また須恵器は大半が6世紀代のものであった。

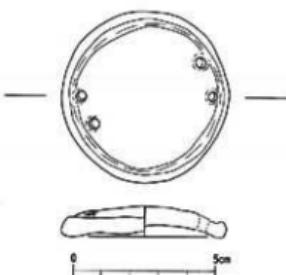
遺物の出土状況について特徴的な事は各層に須恵器・土師器・弥生土器が混在する中で出土遺物総数における弥生土器の占める割合が相当に高い事である。さらに弥生土器の出土レベルや出土遺物も一定していない事から、沖積地に見られるような純粋な包含層とはみなしづく、おそらく、古墳時代後期以降に周辺の古墳時代・弥生時代の包含層が削られ、二次的に谷状の地形内に流れ込み堆積したものと思われる。



第10図 谷状地形内出土遺物実測図



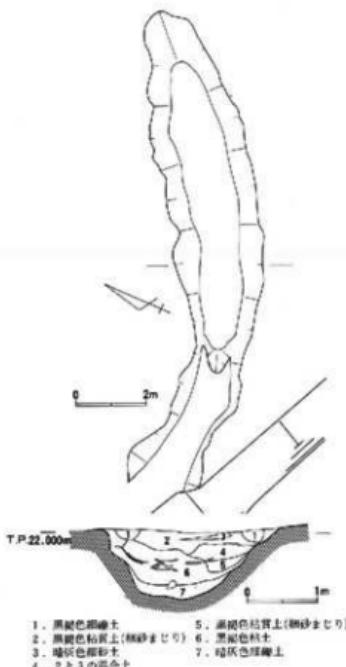
第11図 蓋



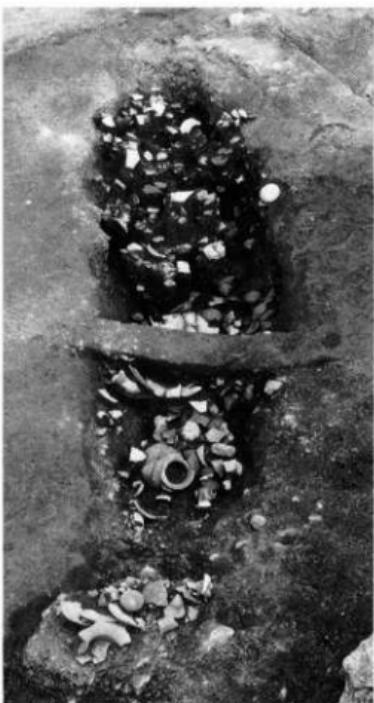
第12図 蓋実測図

B区の遺構は谷状の地形の底面において土坑4基を検出した。ただし、谷状の地形の埋土上面から掘り込まれた遺構も含まれる。

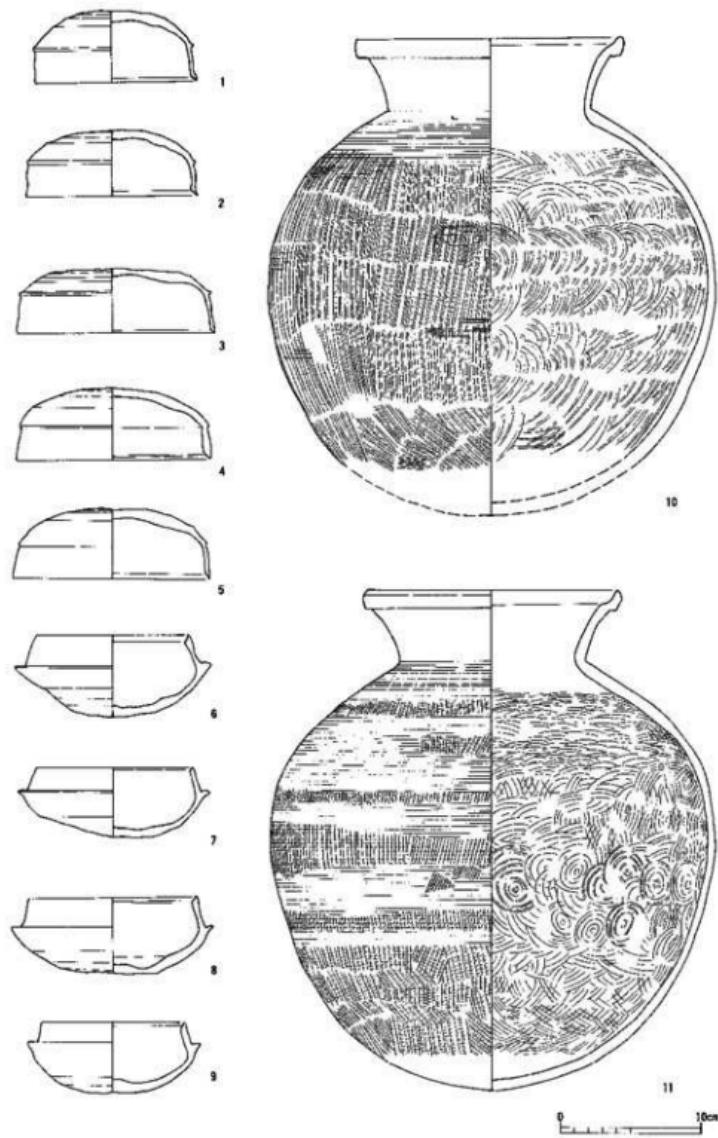
SK-6は幅1.3m、深さ70cmの溝状遺構である。埋土第6層を中心にしてすべての層から多量の須恵器と、土師器、弥生土器が出土した(第15・16図)。須恵器は焼成不良品や焼け重み製品が多く不良品の廃棄土坑の可能性も考えられる。出土遺物は蓋杯・甕が多く、完形品も含まれる。杯蓋(1~9)は短く丸い稜を有し、口縁端部は内傾する凹面もしくは内傾する段を有している。杯身はたちあがりが2cm前後で、端部は蓋と同様に内傾する凹面もしくは段を有しており、底部にヘラ記号がほどこされている製品もある。陶色編年で、I型式5段階からII型式2段階に併行するものが混在しているようである。甕(10~14)はゆるやかに外反する口頭部を有し、端部は屈曲させて肥厚させている。外面には格子叩き、もしくは平行叩きがほどこされ、叩き後のカキ目調整がおこなわれているものもある。内面には同心円文がほどこされており、焼成の甘いものが多い。



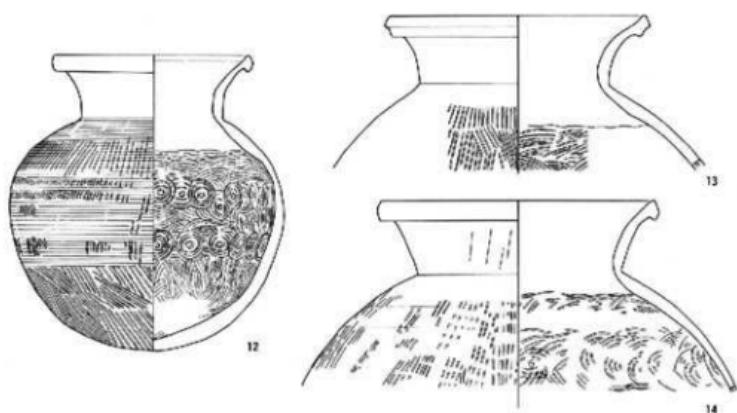
第13図 SK-6 平面図・断面図



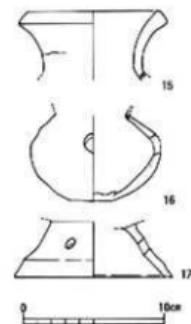
第14図 SK-6 全景



第15図 SK-6 出土遺物実測図



第17図 SK-6 遺物出土状況



第16図 SK-6 出土遺物実測図

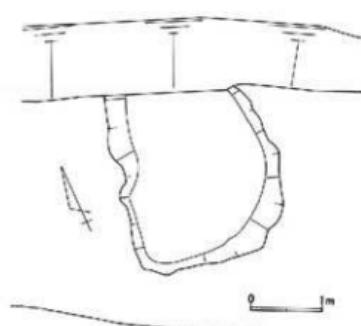


第18図 SK-6 遺物出土状況

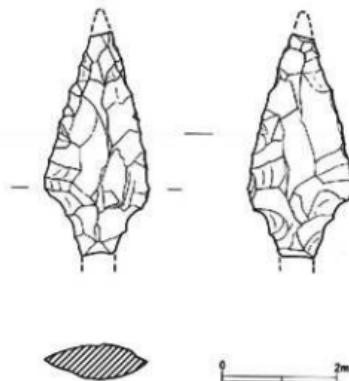


第19図 SK-6 遺物出土状況

SK-7は検出部分で径2m、深さ45cmをはかる土坑であり、北へのびていく。黒色粘質土を埋土とし、下層に細礫がまじる。埋土中より石鏃（第22図）1点と弥生土器（第23図）が出土した。石鏃は凸基有茎式で、先端を欠失しているが、長さ4cmをはかる。材質はサヌカイトである。壺の口縁部（1）は下に引き伸ばされた口縁端部に3条の凹線文を施し、均等距離に竹管文を配している。壺の頸部（2）は頸部付け根に引き出した断面三角形の突帯をめぐらし、その下方に波状文、竹管文を配している。高杯脚部（3）は外面にヘラミガキを施し、内面は未調整である。鉢の底部（4）は橢円形の穿孔を有し、外面はナデが施されている。SK-7は出土遺物から弥生時代中期に比定されるであろう。



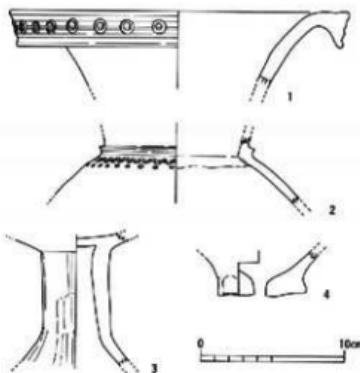
第20図 SK-7平面図



第22図 石鏃実測図



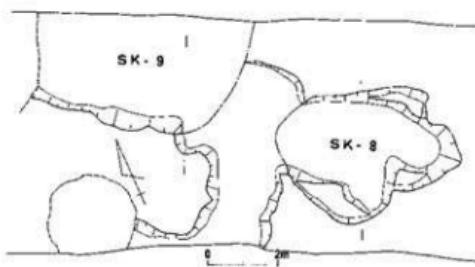
第21図 SK-7遺物出土状況



第23図 SK-7出土遺物実測図

SK-8は谷状地形の埋土上第3層上面から掘り込まれており、SK-9は谷状地形埋没後、埋土上面より掘り込まれた遺構である。

SK-8は径4～5m、深さ50cmをはかる不定形な土坑である。埋土上第1層、第6層（第25図）を中心に多量の須恵器・土師器が出土した。



第24図 SK-8・SK-9 平面図



第25図 SK-8 断面図



第26図 SK-9 断面図

SK-9は検出部幅3m、深さ60cmをはかり、さらに北へつづくものと思われる。埋土は12層（第26図）にわかれ、各層より多数の遺物が出土した。以下、主な遺物（第31図）について記述する。

第2層より、ほぼ完形の瓦器柄（1）1点が出土した。瓦器柄は口径約15cm、器高5.8cmをはかり、器形に著しいゆがみがみられる。断面方形の高台を有し、内面の暗文は丁寧に施されているが、外面の暗文は間隔があいている。体部には指頭圧痕が残っている。時期は12世紀前半頃に比定される。

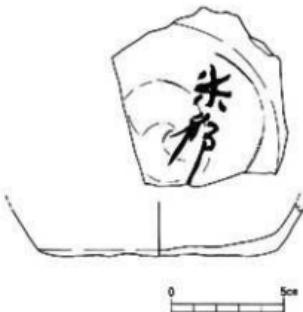
第4・8層より、墨書き器（第28図）が出土した。器種は杯身であり、復元底径10.8cmをはかる。口縁部は内外面ともに回転ナデを施す。底部は内外面ともに不定方向ナデを施しているが外面の調整は粗く、ヘラ切り痕をとどめている。この底部外縁に2文字の墨書きが縁辺部から中央方向へ記されている。上の文字は「米」である。下の文字の旁部は「那」であるが、偏部は墨が重複しており、判読し難い。該当する文字として「那」が考えられる。しかし「米」・「那」の文字の意味する内容は不明である。文字の解説は今後の課題として残される。

同層の他の遺物に須恵器壺の底部と土師皿がある。須恵器壺の底部（2）は復元底径10.8cmをはかり、高さ5mmの断面方形の高台を底部外縁に有している。体部外縁は回転ヘラケズリ、内面及び底部、高台部は回転ナデが施されている。時期は8世紀末頃と思われる。土師皿（3）は復元径21.5cm、器高2.5cmをはかる。底部外縁は成形時の凹凸をそのまま残し、口縁外縁及び内面はヨコナデを丁寧に施している。口縁は底部より外方へ内弯しつつ伸び、端部を外弯させ丸くおさめている。端部内面に1条の沈線が走る。時期は9世紀初頭頃と思われる。

他に同層より土師質の土馬（第30図）が1点出土した。頭部だけが残存しており、断面径4cm、残存長8cmをはかる。飾馬をきわめて写実的に造形しており、目、鼻、口は細い棒状工具による穿孔、切断によって表現されている。馬具類も貼付突帶により面繋が、連続する竹管文によって引手が表現されている。時期は古墳時代後期に属するものと考えられる。



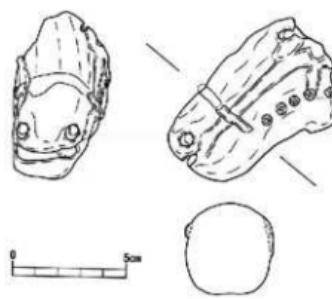
第27図 墨書き土器



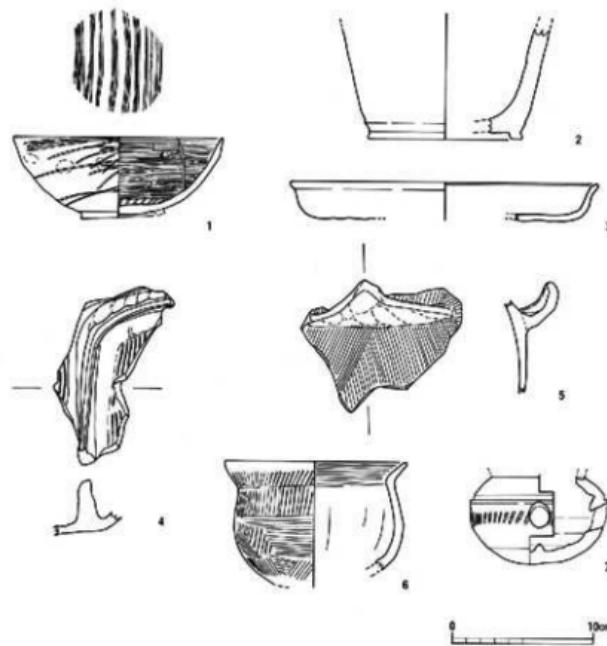
第28図 墨書き土器実測図



第29図 土馬



第30図 土馬実測図



第31図 SK-9 出土造物実測図

第9・10層より、土師質の甕の破片、甕の把手、小形甕、須恵質の甕、板材などが出土した。甕の焚口右隅の鋸部(4)は外面に幅の広いハケメ、内面にハケメが施されている。鋸部には指頭圧痕が残り、ナデが施されている。鋸部にだけススが付着していた。甕の把手(5)は2等辺三角形を呈し、その両辺の粘土を内側に折り曲げている。体部は内外面ともにハケメを施している。甕(6)は復元径13cm、残存高8cmをはかる。外面は口縁部から体部中央にかけてタテ方向の丁寧なハケメを施し、後に口縁及び下部をヨコナデですり消している。体部中央から下部にかけては不定方向の粗いハケメが施されている。口縁内面はヨコ方向に粗いハケメを施し、後に部分的にナデですり消している。体部内面はヨコのハケメを施し、底部は未調整である。甕(7)は最大径9.6cmをはかり肩部に1条の沈線をめぐらし、その下に丁寧に刺突文を施している。板材(第32図)は幅13cm、長さ1.3m、厚さ3cmをはかるが、他に加工痕は無く用途は不明である。

SK-9の埋没年代は出土遺物から8世紀末より9世紀初頭の平安時代初頭頃に推定されるが、各層に6世紀代の須恵器が相当数含まれていた事から、埋没時に谷状地形内の堆積土、もしくは周辺の古墳時代の包含層が削られ、混入したものと考えられる。また、第2層は、瓦器が下の層に含まれない事から、SK-9の上部より掘り込まれた別の造構の埋土と考えられる。



第32図 SK-9 板材出土状況

C区の造構と遺物 C区は調査区の大半を後世の削平により破壊されており、検出した造構は土坑2、ビット5を数えるにすぎない。SK-4は長径1.8m、短径80cm、深さ30cmをはかる。埋土は2層に分かれ、上層に黒褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土が堆積しており、遺物はまったく含まれていなかった。他の土坑及びビットはすべて暗褐色粘質土を埋土とし、若干の須恵器、土師器の細片が出土している。C区の造構は出土遺物に乏しく、明確な時期は不明であるが、埋土の色調から概して古墳時代後期以降と思われる。

註1 大阪府文化財センター「附图Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30報」 1978年

註2 高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査報告書」 1980年2月

註3 奈良国立文化財研究所「平城宮跡発掘調査報告書」 1976年

## V. まとめ

今回の調査地点は新免遺跡の北東隅に位置し、遺跡の範囲を明らかにする上で重要な地点である。当調査及び第11次調査の成果から新免遺跡の北東隅の様子を概観し、残された問題点を挙げて、まとめとする。

**遺跡の範囲** 第11次調査では南北につづく幅80mの谷状の地形を境として、西側に弥生時代中・後期の住居跡群が集中しており、また、当調査では、弥生時代に比定される遺構は谷状の地形内に土坑（SK-7）が検出されただけであり、谷状の地形の東西には認められなかった。以上の事から、弥生時代の集落の範囲はこの谷状の窪地形に制限を加えられ、東へ広がる事はなかったと考えられる。また、集落の北限も、当調査区付近に位置する可能性が考えられるが、しかし今回の調査区の範囲と、後世の削平を大きく受けている事を考えると、北限については今後の調査の課題としたい。

一方、古墳時代後期になると、第11次調査では東へ行くほど遺構の密度が稀薄になるが、掘立柱建物跡を主体とする数多くの遺構が、谷状地形の東西に広く分布していた。当調査でも、明確な建物跡は検出できなかったが、東西両地区より若干のピットを検出しておらず、以上的事から、古墳時代後期の集落は当調査区を越えて、さらに広がっていくものと考えられる。

これ以後、奈良時代から中世になると、遺構は少なく、第11次調査で検出された奈良時代の井戸、平安時代中頃の土壙墓と、当調査で検出された平安時代初頭頃の土坑（SK-9）だけである。新免遺跡の他次調査では整地層より遺物の採集はみられるが、明確な遺構は検出されておらず、古墳時代後期以降、生活の場は北東部へ移動したのかもしれない。またSK-9から圓筒土器の出土がみられ、遺構の特殊な性格をうかがわせている事から、今後、さらに遺構の広がりや具体相に検討を要する。

**谷状地形の広がりと埋没過程** 第11次調査で検出された谷状の地形底面は全体的に平坦面を形成し、遺物も少なく、須恵器を中心として、ほとんどが地山直上の最下層から出土していた。しかし、当調査では、谷状の地形の内部に北側に偏して巾洲状の隆起した礫層が認められ、この礫層はさらに北へつづくものと考えられる。また厚く堆積した埋土からは須恵器と弥生土器が混在して多量に出土した。以上の事から、第11次調査では、谷状の地形の広がりを北西部の沖積平野にのびる開拓谷に連なる可能性が指摘されていたが、この谷状の地形が台地上に在った大きな窪地形の一部分に相当することも、新たに考えねばならないであろう。

次に、地形内の埋没過程を土層と出土遺物から推察すると、古墳時代後期には、まだ原地形を留めており、地山の礫層が削られて移動する程度であったと思われる。これ以降、徐々に周辺の古墳時代・弥生時代の包含層が削られ、流れ込み、埋没したと考えられる。出土遺物に6世紀以降の遺物が含まれてないことから、この時期に埋没は完了したと思われる。また埋土上面からの遺構はSK-9以外ではなく、埋没後は生活の場としてあまり用いられなかつたのか

もしれない。また谷状の地形の堆積層に含まれる弥生土器が全面に広がって出土している事と、この堆積層が第11次調査例には認められず、本調査例にだけ存在する事、つまり北側に偏して堆積している事から、この堆積層が北方からの流れ込みによるものとも考えられ、今後、さらに北方の発掘調査に留意しなければならない。

**土馬について** 今回、検出した土坑（SK-9）より、頭部だけが残存する土馬が出土した。  
豊中市での土馬の出土例は今回を含めて、5例を数える。上津島遺跡、長興寺遺跡、勝部遺跡<sup>註1</sup>、本町遺跡から、それぞれ出土している。上津島遺跡出土土馬は土師質で飾馬を造形したものである。胴部だけが残存し、尻繋が表現されている。長興寺遺跡出土土馬は須恵質で飾馬を造形したものである。胸部だけが残存し、小管の押型を連ねて胸繋、連繋などを表現し、粘土を引き出す事でたてがみを表現している。勝部遺跡出土土馬は土師質で胴から脚の部分が残存し、裸馬を造形したものと思われる。整地層からの出土であった。本町遺跡出土土馬は土師質で頭部から頸部にかけて残存し、飾馬を造形したものである。目、耳、口は細い棒状工具を用いた穿孔、切断により表現し、たてがみも粘土を引き出す事により表現している。また面繩・手綱を粘土帶貼付により表現している。6世紀前半の溝内より出土していた。

当調査の出土土馬は、遺構に意図的に廻棄されたものではなく、二次的な流れ込みに伴う遺物と考えられ時期は不明である。しかし形態や表現方法が本町遺跡出土土馬と類似している事から、同時期に所属するとと思われる。また、新免遺跡と本町遺跡は隣接しており、土馬出土地点も直線距離で200m程度しか離れていない事から、同一集落内の遺物である可能性も考えられる。

土馬の出土は平城宮跡に多く、奈良時代の祈雨や水齋信仰などの祭祀に供う遺物と考えられており、土馬の形態差と伴出遺物から編年もなされている。<sup>註2</sup> 今回出土した土馬及び、本町遺跡出土の土馬は古墳時代後期の遺物と思われ、形態的にも平城宮跡や藤原宮跡の土馬より先行するものと考えられる。今後、古墳時代の土馬の性格や祭祀の内容、平城宮跡における土馬との系譜関係などをさぐる上で貴重な資料となろう。

註1 豊中市教育委員会「新免遺跡・第11次調査概報」 1986年3月

註2、註3 豊中市史編纂委員会「豊中市史・第1巻」 1961年3月

註4 豊中市教育委員会「勝部遺跡」 1972年3月

註5 未報告

註6 泉森咬「大和の土馬」『櫛原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』 1975年

豊中市文化財調査報告 第25集  
新免遺跡第23次発掘調査概報

1988年 3月

発行 阪急宝塚線豊中市内連続立体  
交差遺跡調査団  
編集 豊中市教育委員会社会教育課  
文化係  
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所